

安井息軒著 『志濃武草』の注釈(二)

田中司郎

はじめに

注釈(一)では、「前半の注釈を試みた。今回は後半の注釈を行い、『志濃武草』の全体像を把握するつもりである。

【本文試読】

佐土原と財部のあわいの野を行に大鷄聲絶て海の音折りく聞
こえければ

秋の野や絶て又聞く海の音

綾部生に與ふるの書並びに詩

僕清武の阿蒙足下の大名を聞き一たび清誨を奉らんと欲すること
久し 今や偶貴国に道し乃ち愚劣を揣らず某氏をして紹介せしむ
庶幾くは一たび素志を達せんと 然れども意を得べからざるは
山川の雛気仙骨に近づくを得ざるのみ 大隱市城に隠るとは蓋し
足下の之を謂なり 巴調一篇聊訴ふるも 歉々たり 幸に潤色を
賜らんことを 頓首

山川の勝探ぐるを止め 偶に城傍に出づ 是君子を懐ふが爲なり
豈圖らんや 楚狂を厭はんとは 玄経の室に入りたるを知り 青
眼獨り墻を望む 更に前途の遠きを恨み 由なく錦囊を倒す

【語釈】

○あわい—間。○綾部氏—高鍋藩明倫堂教授。綾部順輔氏か。○僕—謙遜して言うときの一人称代名詞。しもべ。○阿蒙—子どもをいう。○清誨—立派な教え。人の教えを尊んでいうことば。○素志—もとの志。初めからの考えや望み。○鄙氣—自分のことについての謙称。○仙骨—なみなみでない風采のこと。すぐれたひとであることを示すふうさい。○大隱市城に隠る—「大隱市(朝市)に隠る」(白志文集) 悟りきった世捨て人は山の中にいるのではなく、かえって、市中に住み、俗人の中で超然としてくらしているものである。○足下—人に対する敬称。あなた。○巴調—自作の詩歌を謙遜するという言葉。○歉々—あきたりない。不満に思う。○潤色—文章などを飾り、いろどりを加えること。○楚狂—楚の隱者。偽って狂人のふりをし、孔子が乱世を救おうとして東奔西走するのを非難した『論語』微子第十八。○玄経—玄は天地万物の起源、経は物事のすじ道。○青眼—親しい人に対する目つき。対語は白眼。晋の阮籍が自分の好きな人は青眼で迎え、嫌いな人は白眼で迎えた故事(晋書 阮籍伝)。気心の合う友人の意もある。剣道の型の一つでもある。刀の先を相手の目に向けて構えを「青眼」という。○錦囊—詩の原稿を入れる袋。唐の李賀の故事による。他人の詩や詩集をほめることばでもある。

【口語訳】

佐土原と財部の間の野道を歩いて行くと犬や鶏の声も聞こえなくなり、海鳴りが時々聞こえたので

秋の野道を歩いて行くと、絶えていた海鳴りが再び聞こえることだ。

綾部氏に送る書ならびに漢詩

しもべである清武の子どもは、あなたの名声を聞き、ひとたび立派な教えを承りたいと長いこと思っていました。今や偶然あなたの国を通ることになり、そこで、愚かな身を恐れ入ることもなく、なんとかして以前からの志を達成しようとして、ある方に紹介していただいた。しかしながら、もともとからの志を得ることのできないのは、山川の並々でない風貌に近づくことができないのと同じである。悟りきつた世捨て人は山の中などにいるのではなく、かえって、市中に住み、俗人の中で超然として暮らしているものであることを、あなたの姿を見て思うに至った。私の詩歌をわずか一篇だけでご覧に入れるのは物足りない。多くをご覧にいたれたいが、幸いにご覧いただき、文章に彩を加えてくださるならばありがたい。

山川草木の景勝地を尋ねることはやめて進むと、偶然城の傍らに出た。これは君子を思ふてのことである。どうして見計らうことがあるのか、いやない。孔子の東奔西走を非難した楚の隱者のことを思い出した。天地万物の起源、物後のすじ道を説いた書のある部屋に入ったのを知り、青眼でひとり垣根から遠くを望み見る。また旅の前途の遠いことを残念に思い、わけもなく漢詩の原稿を入れる袋を閉じた。

【本文試読】

財部藩の學は朱學を唱して文章を解せず 乃ち曰く文を玩び志を喪ふと 綾部氏は頗る其の範圍を脱する者なり 故に之を訪す

琴弾の松は蚊口川の西になんある 昔源重之日向の守にて下りける時読る 志ら浪のよりくる糸を緒にすけて風に志らぶる琴弾の末

なみならば我より來めや常住に風に調ぶる琴弾の松

【語釈】

○朱學—朱子学の略。朱子学は、南宋の儒者、朱熹が大成した学説。学問究理と道徳実践とによって自己を完成すべきことを説いた。程朱学。江戸時代には、幕府が官学として保護したため盛んに行なわれた。しかし、安井息軒の目指す学問は考証学であった。考証学は明末清初に興った実証的な学問。日本では江戸時代に井上金峨・大田錦城・渋江抽斎らがこれを奉じた。○文を玩び志を喪ふ—「玩物喪志」（『書経』一八）。無用な物をもて遊んで本心を失うこと。学問上、枝葉のことに力を注いで真に習得すべきものを失うこと。○來めや—「めや」は、助動詞「む」の已然形に、係助「や」のついたもの。推量に反語の意を加える。くすることがあるのか、いやない、の意。○常住—いつも。ふだん。仏語で生滅も変化することもなく常に存在すること。対語は、無常。

【口語訳】

財部藩の学問は、朱子学を唱えて文章の真意を理解しない。そこで文章を遊び、学ぶ志を喪失している。綾部氏は、このような学び方はしない方なので訪問したのである。

琴弾の松は、蚊口川の西にある。昔、源重之が日向の守として

下向した時に詠んだ歌。白波で漕ぎつたような糸を緒にすげて行く道に浜風の調べを奏でる琴弾の松を見ることだ。

いついつまでも浜風の調べを奏でる琴弾の松のところに、波はみずから寄せてくるのであろうか、いやそうではないだろう。

【本文試読】

蚊口の浦の名は喧しけれど夕暮れのがめ却て静なりければ名にし負ふ蚊口の浦の夕暮れはかく手もたゆし寐るもねられず

夏口浦に宿る

夏口江頭満岸の家 樵父に相従ひ漁翁を訪ふ 主人頗る静中の味を嗜む 旅館に初めて世上の唾きを逃る 百里の郷遥かなれば雨色を愁ふる 三更舟落ち燈華に對す 四簷猶自ら晴意無きがごとく しばしば波濤を聴きて緑茶をせんず

常陸てふ祝部子旅の宿訪らひ詣で來ぬかたみに古の事共ことごとしく語りもて行て夜深で帰りぬ 明の日つとめて読て遣しける

けふよりも神世の秋も知られける君が言の葉紅葉しぬれば

雨中夏口浦を發く

濛々と前路暗く 蓑笠江村を出づ 怪し此に途窮るとは 頻りに雨露を蒙るの恩

浦邊の道の果てしなき雨打志きりて常尋の間も見へ分す 事問へきよきよすかさへ絶て遠路近路のたつき覺束なし かかるふしにこそ旅のおかしみは猶深かりける

我來ぬる方さへ見へず霧に煙の立そわりつつ

【語釈】

○樵父—樵夫。きこり。そまびと。○三更—夜十一時から一時まで。夜の十二時ごろ。○燈華—「燈花」。ともしびの灯心のさき

に燃えかすの固まりが花の形にむすばれたもの。また、ともしびのはじけることをいう。○四簷—「簷」は、ひさしのように物を覆つて四方にたれさがるもの。○てふ—「といふ」の略。というの意。○祝部子—神に仕えるのを職とする者。普通には、禰宜(神主の下、祝へはふりゝの上に位する神職)。普通には禰宜の次位で祭祀などに従つた人。

【口語訳】

蚊口の浦の名は、波の音で喧騒に満ちているけれども夕暮れの眺めはかえって静かであるので

有名な蚊口の浦の夕暮れはあまりにも静かなのでかく手もだるく寝入ることもできない。

夏口浦に宿泊した。

夏口のほとりの岸いっばいの宿。樵夫に従い、獵師の老人を訪ねる。主人は、すこぶる静かな味わいを嗜む人である。旅館で初めて世間の喧嘩から逃れることができた。郷里は、遙かに遠いところなので雨の景色を愁うる。夜の十二時ごろ舟は見えなくなり、灯火に向き合う。家の四方のひさしはおのずから晴れの気配はなにかのようで、しばらくの間、波の音を聞きながら緑茶を煎じる。常陸という祝部子は、旅の宿を訪ね、詣で來た記念に昔の事をすべて話し、夜更けてから帰つて行つた。翌朝、詠んで送つた。君の言の葉は、紅葉の趣になつてしまったので、今日より神代の秋をおのずと知ることである。

雨の中の夏口浦を出発する

小雨がしよぼしよぼと降り、行く道中は暗い。蓑笠着けて川端の村を歩いて行く。不思議である。ここで道がつきるとは。頻りに雨とつゆの恵みをいただいたお陰であらう。

海浜の道がずっと続く上に、雨がしきりに降ってわずかの間も見分け難く、状況を尋ねる手がかりさえなくなり、遠近の手がかりもおぼつかない。こういう時にも旅の興趣はやはり深かった。自分のやって来た方角さえわからない雨具に霧がますますまつわりついている。

【本文試読】

雄雀瀑歌

夏口浦を距ること南五里瀑布有り 高五丈幅三丈怪石奇樹峩々鬱々たり 其の側ら実に境し一大壮观なり 名づけて曰く於雀が瀑と 里人曰く 昔於雀といふ者在り 里中の女なり 身投じて死ぬ故に名づく 予其の名の雅馴ならざるを病ふ 乃ち改むるに雄を以てし於雀瀑歌を作る

於雀翩翩と九天より下る王喬銷笙を吹けば響凄然たり 西に従ひ崑崙の極に至るを知る 羽砕け毛飛び醴泉を飲む 黄石赤松保護を争ふ 片雲垂翼一千年 餘波遠く人間の世に注げば 斟得たる下流便ち仙を得 頻年嘗源を究める客為し 彩雲玉宮の邊を掩翳す 我亦名姓を仙籍に録せん 暫く人間を謫して詩篇に隠る 太白縦横肩するに足らず 廬山を幽賞するに坐して相延す 爲に汝高く鳴け九臯の上 更に令聲を九天に聞かしめよ

お雀はその人の名をやがてしるすなり 天離る鄙の女は心こわごわしくてかかる猛き業をも爲けり さはさりながら行衛も志らぬ恋の悲しさにそ深き思ひの淵に沈みけるらしと 昔の思ひやりて

玉の緒の絶て乱る岩の面にお雀の瀑つ水増りける

【語釈】

○瀑―たき。水しぶき。○峩々―山の高くけわしいさま。姿の立

派でいかめしいさま。○鬱々たり―樹木のこんもりと茂っているさま。○雅馴―文章の字句の正しくて穏当なのをいう。「雅」は正、「馴」は順で順理穩当の意。○翩翩―鳥が身軽に飛ぶさま。○九天―大空。○王喬―王子喬。周、靈王の太子。名は晉。もと姫姓。直諫して廢せられ、庶人となる。一説に晉、好んで笙を吹き、鳳鳴をなす。伊洛に遊び、嵩山に登ること三十余年、登仙し去る(列仙伝)○凄然―非常にもの寂しいさま。寂しくいたまじいさま。○崑崙―山の名。昔、中国の西方にあると考えられていた靈山で西王母が住むといわれた。「崑玉」は、崑崙山から出る美しい玉。転じて、すぐれた詩文をいう。○醴泉―甘味のある泉。いろどりのある雲。○掩翳―おおい隠すこと。○仙籍―仙人の戸籍。侍臣の名札。殿上に出仕する者の名札。○人間―俗世間。○謫―せめる。罪する。○太白―はなはだ潔白なこと。○廬山―中国、江西省北部の名山。○幽賞―静かに褒め味わう。○九臯―奥深い沢。深く遠いところのたとえ。○令聲―よい評判。○天離る―「鄙」の枕詞。○玉の緒―「靈(たま)の緒」の意から「命(いのち)」のこと。

【口語訳】

お雀瀑歌

夏口浦から南に五里ほどのところに滝がある。高さは十丈、幅は三丈で、見たこともない石や樹木があり、山は高く、樹木はこんもりと茂っている。その相対するものの一方は、実に近く壮大な眺めである。名付けて於雀が滝と。里人が言うには、むかし於雀という人がいた。村の女である。この女が身投げしたので於雀が滝と名付けた。

予は滝の名が順理穩当でないので憂える。そこで雄の文字を用

いて雄雀瀑歌を作った。

雄雀は軽々と大空から下る。漢の時代の仙人である王喬が笛を吹くと響きは寂しくいたましい。西に従い、崑崙の果てに到着したのを知る。羽は砕けて毛は飛び、甘味のある泉を飲む。黄石赤松をかばい守ることを競っているかのようなのである。一切れの雲が翼を垂れ下げて飛ぶこと一千年。余波が遠く人間の世に注ぐと、汲み得た下流はすぐに仙人を受け止める。毎年、これまで源を究めた客はいない。いろどりのある雲は、玉宮のあたりを覆い隠している。私もまた名姓を仙人の籍に記そうと思う。しばらく人の世をせめて詩篇に隠す。はなはだ潔白なことを思うままにすることを潔しとしない。中国の昔の名山路山を静かに褒め味わうために座り相延ばす。更に声を天の最も高い所に聞かせよ。

お雀の滝はその人の名をそのまま記している。田舎の女は、こわばっていてこういう猛々しいことをなしたのだ。それはそれとして、行方もわからない恋の悲しさに耐えず深い思いの淵に沈んだらしいと、昔の様子が思い遣られて

命の絶えて乱れる岩の面にお雀の滝の水が増さっていることだ。

【本文試読】

海上行

請ふ海上十餘程 白碩青松徹底清し 前津の風浪悪きを嘆かず
久しく捨つ 人世の利と將名と

荒磯海の波こわごわしく立ちさわぐを見て謝玄か雪の塩あんはい
実にさもおほへければ

和田の原はらりくと降る雪を塩といふたは知恵の海哉

【語釈】

○程—みちのり。○白碩—白い砂原。○謝玄—晉、陽夏の人。官

は建武將軍、江北諸軍事を監事した。

【口語訳】

海上の旅

海上十里余りの旅をお願いしてみた。すると白い砂浜、青松が一面に広がり清しい。眼前の悪天候の風や浪を嘆くこともしない。しばらくの間、利欲、名譽から遠ざかり世捨て人となった。

荒い磯の波がごつごつして立ち騒ぐのを見て、東晉の將軍謝玄の雪の塩加減もこのようなことだと思われたので

和田の原にはらりはらりと降る雪を塩と見立てたのは知恵の海のお陰だ。

【本文試読】

烟雨三方津を渡る

即ち徳河なり 三州牙出ずるが故に三方津と曰ふ

一葉飄然と白鷗を伴ひ 三州十曲秋に勝えず 中流にて頭を廻せば
唯烟雨 誰か道ふ蓬萊竟にも求むべきと

狙公が昔に引かへて朝三暮四の飢を狙に助けらる 男に行逢ひ
ければ

秋風の吹く日もあるぞ猿まわし

戯に酒家の壁に題す

山水霞盃を勸むれば 霞盃妙才を鼓つ 錢囊盡く倒れ去り 却つて
詩囊に入りて來る

【語釈】

○一葉—一枚の木の葉。一雙の小舟のたとえ。○飄然—ひらひらするさま。○白鷗—白いかもめ。○十曲—とおまがり。○蓬萊—想像上の仙山の名。東海の東にあり、仙人が住んでいたという。

○狙公—猿を飼う者。猿回し。○朝三暮四—偽って人をごまかす

こと。春秋時代、宋の狙公が、飼い猿に朝三つ、夕方四つとちの
実をやると言ったら猿が怒ったので、では朝四つ、夕方三つやろ
うと言ったら猿が喜んだという故事『列子』黄帝 第二。○霞
盃―美しく雲気のあるさかずき。○妙才―優れた才能。○詩囊―
作った詩を入れる袋。詩思。詩情。

【口語訳】

けむったように霞んで降る雨の三方津を渡る。

すなわち徳河である。三洲牙が出ているようなので三方津とい
う。一雙の小舟は、ひらひらと白い鷗を伴い、三洲十曲の秋に歌
い尽くせない。中流で頭をめぐらすとただけむったように霞んで
降る雨。誰が言うであろうか。蓬萊の国をついに探し求めるこ
ちができた。

狙公が昔、朝三暮四の餌を狙に与えて助かったことがある。男
に出会ったので

秋風の吹く日もあることだ、猿回しよ。

戯れに酒家の壁に漢詩を記した。

山水の霞の中で盃を勧めると、美しく雲気のある盃が妙なる才を
鼓舞する。錢囊はことごとくなくなり、かえつて漢詩が囊中にお
さまる。

【本文試読】

櫂が原八重の塩路は三筒雄の神あらわれ玉ひし所になん松の林
の

さらさらしき中に宮柱太しき立るそ猶神代の志るしなりける

千早振神代の祓見きや否や 問ふと志浪かかる姫松

渚の清らなるに打出きたれば波いとあれて風冷まし折りしも遥

かの沖よりあま小舟の漕きたるを見て讀る

海人小舟八重の塩路をこき分て出來し神の昔おもほゆ

松林晩歩

松林行きて盡きず 岐路自から縦横 西に転し將南折す 略知る

物外の情

神武天皇祠に謁し奉る

武皇は人皇の第一世の帝なり 初め此に都し 後東征し 中原

を清めて乃ち都を大和に移す 今を距つること蓋し三千年許り

祠は墟の東七里に在り 歳時の祀今に至りて絶へずと云ふ 然

れど 未だ立つところの歳及び土人自ら竊に祀る所なるや否や

を詳らかにせず

風寒く黍稷自から離々 萬古神靈小祠あり 今日東遷何を用て嘆

かん 皇威は遠く此に都せし時に勝る

玉梓の道も見へ分ぬ頃小戸の流に到りぬ きふより小雨に河

波いと白く立ちさわきければ讀る

舟人となりてやおらん橋の小戸の川波帰りしらずも

【語釈】

○三筒男―表筒男、中筒男、底筒男の三神。○さらさら―物が軽
く触れ合つて発する音の形容で副詞。形容詞の使用例は珍しい。

○おもほゆ―四段動詞「思ふ」の未然形に上代の自発の助動詞
「ゆ」のついた「おもほゆ」の転。自然に思われる、ひとりでに
思われてくるの意。○物外―世事を離れた場所、俗世間の外。○

中原―天下や国の中央部。○黍稷―もときびとうるちきび。○玉
梓―「たまあづさ」の変化した語。便りを運ぶ使者の持つ杖。転
じてその杖を持つ人。使者。手紙。書簡。便り。文章。

【口語訳】

櫂が原の幾重にも重なった塩をつくる道は、三筒男の神々が現

れなされたところである。松の林のさらさらとした中に宮柱で高いのが立っているのが神代のしるしである。

神代のお祓いを見たか、見なかったかと、尋ねると姫松に白浪がかかっている。

波打ち際の清らかなところに出てみると、波がとても荒れて風が冷たい。丁度このとき漁師の小舟が漕いで来たのを詠んだ歌。

漁師の小舟が幾重にも重なった塩を作る道を漕ぎ分けて出て来たのを見ると、神代の昔が自づと思われることである。

松林を暮れに歩く。

松林を歩いてても歩いてても尽きるところがない。別れ道が縦横にある。西に歩みを進め、また南に折れて歩みを進める。おおよそ世間を離れた場所であることがわかる。

神武天皇の祠にお参り申し上げる。

武皇は、人皇第一世の帝である。初めはこの地を都とし、後に東征し国の中央の乱れを平定し、そこで、都を大和に移した。思うに今から三千年前のことである。祠は、墟の東七里のところにあり、一年の祀は今に至り、絶えていないという。しかし、いまだ祠の立っているところが土地の人のひそかに祀るところであるかないか、はつきりしない。

風が寒く、もちきびとうるちきびの穂が垂れさがっている。今日どうして東遷を嘆こうか、いや嘆こうとしない。今や皇威は遠く此の地に都を置いた時に勝っている。

使者の行く道も分からない頃、小戸の流域に着いた。昨日からの小雨で川波が白く立ち騒いでいたので詠んだ歌。

船頭の気持ちになつているのであるうか、橋の小戸の川波の帰りゆく先が分からないことだ。

【本文試読】

帰路偶作

江店に微酔を沾へば 城鐘二更を報ぐ 前山猶雨色のごとく 舊
澗大泉の聲 村静かなるに驚虬吠え 炬明るく買客行く 唯懼る
家室の上 更に愴まん倚門の情

家に帰りて大人に呈し奉る

泥路坦にして砥のごとく 連朝興の奇しきを発するも 囊中献ず
べきもの無く 唯記す数篇の詩

せふとの君に讀みて奉りける

烏羽玉の暗はあやなし旅衣錦の袖はかささらなん

戯に諸君に呈す

連日山々去り 山中は俗埃を盡くすも 仙丹得べからず 手を空
しふして帰り來る

懷舊志終る

子元君都於郡より還るを迎ふ

野義比

紛々たる陰雨帰程を隔ぐ 渡雁哀聲に更に到る 此の夜帰り來る
高館の上 盃を舉げて先づ問ふ旅中の情

秋雨の中友人宅に集ふ 子元君都於郡に在るを懷ふ

長倉寛

交歓暫く絶ゆ酔中の仙 何事ぞ尊前少か一賢 陰雨紛々たり古城
の上 揮毫時に指す雁行の天

全

高元吉

別後偏ら蕭策たり 窓前望眼睽む 南江に孤雁叫き 北嶺雲を断
ちて遮る 夜々塵夢を成し 朝々徳華を慕ふ 雨中應に賦有るべ
し 何處にか仙車を駐めん

都於郡より帰る明けの日 各此の詩を持して訪はる 感其れ戀々

の意無き能はず 乃ち併せ之を記して云ふ

如何にせん都の春も惜れどなれし吾嬬の花や散らんと読し古へ人の美やびたる心なめりさるをこたび京の旅思ひ立ぬるは如何で家の風をも吹せてしかなと思ふ心のいとせちなれば一夜燈の微なるに書讀み居たるに

家の大人來り玉ひて更てたに悲しく哀なるは秋の日なりけり三年の夕暮れいかて忍んでそのたつきともならん物遣てんやなど打わらひ玉ひければ此巻書て奉りぬ

故郷の簷端に生てふ忍草夢やはかれん年はてぬとも
文政三年歲次庚辰秋九月晦記之

南陽 安井正 子元

【語釈】

○江店―川べりの店。○二更―夜の九時から十一時。○舊澗―谷川。○尨―むく毛の大犬。○炬―かがり火。松明。○賈客―商人。

○家室―夫婦によつて構成される家庭。住まい。家。○倚門の情―門渡るによりかかり、わが子の帰るのを待ち望む母の情を云う。

倚(閭)の望。『戦国策』齊下による語。齊の閔王が所在不明になつた時、王孫賈にその母が戒めて言つたことば。(『日本国語大辞典』)○せふと―兄(息軒の兄、清溪)。○烏羽玉の―枕詞。「ぬ

ばたまの」の転。「黒」「夜」「神」「夢」「月」などにかかる。黒いものや暗いものにかかるのがもとで、そこから「夜」に、さらに

「夢」「月」などにもかかる。○かさささらなん―「かささざらなん」(現代音)。「なん」は、「なむ」の撥音便。他に対して詠え

望む意を表す終助詞、未然形接続。○仙丹―服用することによつて不老・不死となり、ついには仙人になると言われる靈藥。○一

賢―一人の賢い人。○揮毫―書画を書くこと。揮筆。○蕭策―細々

としてのさびしいさま。○吾嬬―特に京都からみて関東一帯。

あるいは鎌倉・鎌倉幕府・江戸をいう称。○美やび―雅び。動詞「みやぶ」の名詞形。宮廷風であること。上品で優雅なこと。風雅。封亮右。○なめり―「なるめり」の「る」の部分が撥音便化して「ん」となり、「ん」が表記されないもの。○てしかな―

「て」は完了の助動詞の連用形。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。「か」は疑問・感動の「か」。「てしかな」で「感動を込めた希望を表す。多く不可能なことを希望する場合に用いられる。

○せちなり―形容動詞。「切なり」。切迫しているさま。のつびきならないさま。個々利にぐつと迫るさま。○大人―目上の人を尊敬していうことば。君主・父・母・科長・伯叔父などに用いる。

○たつき―「たつき」(方便)とも。手がかり。方法。手段。頼り。○てんや―「てむや」の「む」の部分が撥音便化して「ん」と表記されている。「て」は推量の助動詞「む」に接続している

から強意用法。動作の強めや確かめを表す。○生てふ―「てふ」は「といふ」の約。○やは―反語表現。「であろうか、いやない」

の意。○かれん―「かれ(枯れ・乾れ・涸れ)ん」。「ん」は推量の助動詞「む」の撥音便化したもの。○へぬ―「経ぬ」。「経る」

は「経(ふ)」の連体形で、「時がたつ」「歳月を送る」の意。○とも―終止形「ぬ」に接続し、逆接の仮定条件を表す。「くても」の意。

【口語訳】

帰路偶然作つた漢詩

小戸の川べりでうとうとしていると、城の鐘が二更(九時から十一時)を知らせる。眼前の山々はやはり雨のようで、谷川の大きな流れの響きが聞こえる。村は静かであるのに驚くようなむく犬

が吠える。篝火が明るく照らされ、商人が行く。ただ家のことを心配している。母が旅にある子の帰りを待ちわびて老いることを思うと身にしみて心がいたむ。

家に帰りついて父（滄洲）に旅日記を差し上げる。

泥路は、平坦で砥石のようである。毎朝、作歌の興趣が湧きけれども、入れ物の中に献上できるものはなく、ただ数篇の漢詩を記すばかりである。

兄人（息軒の兄 清溪）の君に詠んで差し上げた。

闇の中では分別ができない。錦の立派な袖はかささないでほしい。

戯れに諸君に呈上する。

連日山々を越え去り、山中では俗事を尽くしたけれども、仙菓を入手できない。何も入手することはできなくて再び帰って来た。

懐古終る。

あなたが都於郡からお帰りになったのを迎える

野義比

入りまじって乱れた雨は帰り道をふさいだ。渡る雁は哀しい声で再びやってきた。今夜帰ってきた立派な館のほどり。盃を挙げて旅中の感懐を尋ねる。

秋雨の中、友人宅に集まり、あなたが都於郡に在りし日を追懐する。

全

長倉寛

お互いの喜び合いは暫く絶え、酔い真つ只中の仙人となる。どのような事であろうか、あなたの少しの賢さとは。入りまじって乱れた雨降りの古城のほどりでの作品は、空を渡る雁の姿であったらうか。

全

高元吉

別離後、ただものさびしい日々であった。窓の前の眺めは変わった。南の入り江に一羽の雁が鳴き、北の嶺は分断して遮る。夜は人の世の平凡な夢を見て、朝は優れた華々を慕う。雨の中の作品が恐らくあるであろう。どこにそのすぐれた作品はとどめてあるのだろうか。

都於郡から帰った翌日、各自この漢詩を持って私を訪ねてきた。感懐即ちそれぞれの思いを述べたものである。そこでこれらを併せ記して云々。

どうしようか。都の行く春も惜しいけれども、住み慣れた東国の花は散つたのであろうかと詠んだのは古人の優雅な心からくるものようである。しかし、このたび京への旅を思い立ったのはどうにかして家の風を吹かせてほしいという意を思う心は痛切である。一夜、灯火のほのかなるところで書籍を読んでいると、父君がおおいでになり、更けてさえ悲しく哀切なのは秋の日であることだ。この三年の夕暮れの悲哀をどのようにして忍び耐えようか。この忍び耐える手がかりになるものをいただけなものかとお笑いになるのでこの巻を書いて差し上げた。故郷の軒端に生えていゝる忍ぶ草よ、年月は経ても夢としてかかれることがあるか、いやないであろう。

文政三年歳次庚辰秋九月晦記之

南陽 安井正 子元

おわりに

『宮崎女子短期大学紀要』第三十一号で前半の注釈を終わり、今回後半を行い、終了できた。先学の諸論考、諸資料のお陰である。厚くお礼申し上げます。

本年、八月二四日、二泊三日の行程を、川添武彦本学事務局長に自家用車で案内していただいた。中野、花立、加納、源藤、曾井城跡、柏田、竹篠城跡、岩爪、大安寺、浮舟城跡、潮井、琴弾の松、蚊口の浦、雄雀の瀑、一ツ瀬川、廣瀬、檜ヶ原、皇宮屋、中野の行程である。自家用車で距離にして一四キロメートル、所要時間は四時間半であった。途中、道路の改修工事が行なわれており、二泊三日の行程をそっくり追体験することは不可能であった。

途中、雄雀の滝の標示がないので滝に隣接している食堂の方に伺ったところ、「はいそうです」の返事があり、著者の感動を追体験でき、しばしたたずんだ。ここで息軒は、雄雀の心情に想いを寄せ、さらに漢詩の世界に想いを馳せて诗情豊かな紀行文にしている。

一泊目は潮井で、二泊目は蚊口の浦である。蚊口の浦から雄雀の滝のあたりまで徒歩、ここから一ツ瀬川の河口まで船旅をしてこの日に徒歩で中野に帰りついている。自家用車で行程をたどってみて著者は異常と思えるほどの健脚だったのでないかと思われる。また、この行程の途中、神社や仏寺があるが立ち寄っていないのはなぜだろうと思った。おそらく旅の目的が、先祖の墳墓の地である都於郡を尋ね、綾部氏にあることであつたからだろうと思われる。なお、旅程の途中、神社、仏寺、道祖神が多数ある。これらは道しるべとなり、効率的旅の展開にプラスしたのではないかと思う。

ここで清武町内で入手できる、滄洲、清溪、息軒に関する資料を若干紹介する。『志濃武草』読解の一助になることを願っている。

「文化人の一面をもつ滄洲は、和歌、俳句、漢詩を交えて綴られた紀行文を十数編遺しており、俳句仲間と景勝や四季折々の風景を詩に織り込みながら近郊の旅を楽しんでいたようで、そのなかの延岡紀行文『卯の花』（文化十五年）で南陽と号して十九歳の息軒

が同行しているが、おそらくこれが息軒初めての旅であつたと思われる。

また、文政三年、息軒は、滄洲が工面した前述の学資（城ヶ崎の商人、南村恵蔵の学資援助）をもって大阪遊学を行うが、その直前故郷の思い出にと主君伊東氏の古跡都於郡に独り旅をし、和歌を中心とする初の著作、紀行文『志濃武草』を著し、滄洲に送っている。兄清溪もこの紀行文に序文を送り、息軒は家族の思いを胸に大阪へと旅立つが、翌年清溪は病死し、息軒は深い悲しみのなか猛勉強に明け暮れている」（『安井息軒―その学問の真髓と生涯』清武町教育委員会発行）

「安井 二蘇」

安井家の生計は楽ではなく、息軒は、兄（清溪）とともに家計を助けようと毎日畑に通いました。

父の影響か、この兄弟も幼くして学問を好み、畑仕事の休憩や往復の時間も惜しむように書物を読みました。武道隆盛の当時、友人は、「猿が本を読む」「猿引きも一緒だ」といってこれを嘲り笑いましたが、息軒は、十五歳までに父の蔵書のすべてを読み尽くし、他所に違った書物があると聞くと、遠くでも夜道を通ってこれを借りて読みました。やがて嘲り笑っていた村人の意識も変わり、この兄弟を宋の蘇軾、蘇轍に比べて「安井二蘇」と呼び讚えるまでとなったそうです。

「志高く」

大阪での苦学は兄の死（文政四年 息軒二十三歳）による帰郷で終わりましたが、向学の念は押さえ難く、文政七年二十五歳で江戸に出て昌平坂学問所で古賀侗庵に学びました。日向の田舎出で背が低く、痘痕面の貧乏書生は、門人たちの嘲笑を誘いました

が、これに対し息軒は次の和歌でこれに答えました。

今は音を忍ケ岡のほととぎす

いつか雲井のよそに名乗らむ(国指定史跡 安井息軒旧宅
「きよたけ歴史館」紹介パンフレット)

使用文献

- 安井息軒著『志濃武草』コピー(宮崎学園図書館蔵 二〇〇
三)
- 井田米蔵編集『息軒・滄洲紀行集・道の記』一九八八)
- 清武町教育委員会初行『安井息軒 その学問の真髓と生涯』
一九九九)
- 清武町教育委員会発行『きよたけ歴史館』二〇〇二
- 清武町安井息軒顕彰会発行『歴史散歩・きよたけ 第5集』
一九九九)
- 宮崎県高等学校歴史部会編『宮崎県の歴史散歩』(山川出版
社 一九九九)
- 野口逸三郎監修『宮崎県の地名』(平凡社一九九七)
- 吉田賢抗著『論語』(明治書院 一九六八)
- 清武文教百五十年史編纂委員会『清武文教百五十年史』(安
井息軒顕彰会 一九五一)
- 諸橋轍次著『大漢和辞典』(大修館書店 一九五二)
- 倉野健司著『古事記評解』(有精堂 一九六二)
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞共著『日本書紀 上下』(岩
波書店一九六七)
- 小沢正夫著『古今和歌集』(岩波書店 一九七二)
- 林秀一著『戦国策 上中下』(明治書院 一九七七)

- 水沢利忠著『史記 八』(明治書院一九七〇)
- 小林信明著『列子』(明治書院一九六〇)
- 星川清孝著『楚辞』(明治書院 一九五一)
- 服部宇之吉・小柳司気太著『詳解漢和辞典』(富山房 一九
六三)

- 小川環樹・西田太一郎他共著『新字源』(角川書店 一九七
四)
- 簡野道明講述『名詩類題選評釈』(明治書院 一九六七)
- 小野沢精一著『書経 上下』(明治書院 一九八五)
- 新村出『広辞苑』(岩波書店 一九九一)

「安井息軒著『志濃武草』の注釈(一)」の加筆・訂正

- ・3ページ「やゝ寒し重祢着玉へ旅ころも」の作者「士誠」を
「垂瓠」に。「やゝ寒し重祢着玉へ旅ころも」の次に「ころも
に雁の寺もきけ旅の暮」を補足。

- ・⑩ページ 下段十三行目の「浮舟晚眺」は「浮舟城晚眺」に訂
正。

- ・⑬ページ 下段最終行の次にある本文が三行脱落していたので
次に掲げる。補って味読していただけたら幸甚である。

興鏡部生書^{并詩}

僕清武之阿蒙閑足下大名欲一奉清誨
者久矣今也偶道貴國乃不揣愚劣使某
氏紹介庶幾一達素志焉而不可得意者